

シルヴィア・プラスの作品における死のイメージ

大槻直子*

Images of Death in Sylvia Plath's Works

Naoko Otsuki*

Sylvia Plath employed many images of death in her works. Most readers attribute such images to the experience of losing her father at a young age, and to her own general sense of self-contentment. Her father passed away when she was eight, and the experience eventually led her to write poems about her father. In this paper, I examine what kind of effects these images of death—which are usually depicted without any trace of sorrow—have upon readers. One effect is that, by interpreting these images of death symbolically, the reader is able to imagine her works from another point of view. That is, the symbols of death provide us with another way of reading. Her works express not only her personal sorrow but also an additional meaning which readers can access freely through these symbols of death. The second idea developed in this paper is that her works themselves can be read as a kind of myth. The images of death also symbolize mythical elements; for example, in her poem “Lady Lazarus,” Plath employs the image of a revived woman who bears a resemblance to the god of Egyptian myth, Osiris. Such elements of myth evoke in her readers an impression of mysterious universality. In conclusion, the images of death in Plath’s poetry can be read in a variety of ways, and this openness to interpretation makes the experience of reading her all the more enjoyable. Plath too must have found great satisfaction in achieving such ingenious, multi-layered expression.

1. はじめに

詩人シルヴィア・プラス（1932–1963）は、死を連想させる作品を数多く発表している。これは、彼女が幼い頃に父親の死を経験したことと大いに関係している。この関連性は、プラス研究者や、彼女の生い立ちについて知っている者であれば誰もが当然のこととして把握しているもので、プラスの作品について論じるにあたり、必要不可欠な要素である。本稿では、プラスの作品における死のイメージをとりあげ、彼女がなぜそれをういて詩作するのか、どんな効果として与えているのかを考察する。

まず、プラスの生涯についてふれていきたい。シルヴィア・プラスは1932年、ドイツ人の父オットーとオーストリア系2世の母オーリアとの間に誕

生したアメリカ人である。オットーはボストン大学の生物学教授であり、蜂の研究をしていた。プラスが8歳の時に父は死亡し、彼女は父親に見捨てられたと考えるようになり、そしてプラス家の生活が厳しいものとなる。父親の不在のまま、プラスは大学在学中に自殺未遂をおこすが学業を優秀な成績でおさめ、フルブライト奨学金を手にし、イギリスへ留学する。1956年のことである。そこで彼女は詩人テッド・ヒューズ（1930–1998）と出会い、結婚し、アメリカへ戻るも1959年にはイギリスへ戻り、そこで2児の母となる。

家庭を持ちながら詩作することの困難さ、そして知り合いの少ない土地ゆえの孤独は夫の裏切りによってさらに高まり、1962年11月に子供をつれて別居を始める。この孤独のせいなのか、何か他に原

*東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師
2009年9月16日 受理

因があったのであろうか、1963年2月11日、子供を残してガスオーブンに頭を入れて自殺する。

プラスの自殺は、夫ヒューズが原因であるという非難もあれば、逆にプラスの性格ゆえであるとする言及がある等、良くも悪くも注目を集めることとなった。彼女の遺稿はヒューズによって管理され¹、そのうえ、彼はプラスの日記を破棄した²ので、彼女の自殺の原因を明らかにするのは非常に難しい。

2. 死のイメージを持つ作品について

プラスの死後、ヒューズによって編集された詩集 *Collected Poems* (1981) によると、ヒューズと別居した1962年から1963年の自殺をするまでに作られた詩の数は、1960年と1961年のそれよりも上回っている。おそらく、プラスは自身のさびしさや不安を払拭するために詩作に集中していたと言える。特に彼女の遺作のうち、“Edge” (1963) は穏やかな死を連想させる作品である。“Edge”にかぎらずとも死をイメージさせる作品はいくつもある。例えば、“Electra on Azalea Path” (1959) では、父の死とともに、プラス自身のことを示していると考えられる“I”も死後の世界とされる土の下へこもり、喪失感を表現している。また、“The Rabbit Catcher” (1962) では、畏にかかったウサギの死をプラスは最後の行で“The constriction killing me also”と、まるで自分が畏にかけられて死んで行くように表現している。

プラスの作品の中には死のイメージに加えて、幾分グロテスクな描写をほどこしているものもある。“The Surgeon at 2 a.m.” (1961) では、肺や心臓と言った臓器を、例えば肺のことをはじめはランの花にたとえているのだが、その次には「蛇のようにしみをつけ、とぐろを巻いている」と表現している。そして、魂にたとえられた“a small blue light” (line 41) がベットに寝ている患者の体から舞い上がる、つまり死を幻想的に表現している。

このように簡単ではあるが並べあげたとおり、プラスは死をイメージしやすい言葉を使うこともあれば、花のような生あるものにグロテスクな表現を付け加えることによって死のイメージを際立たせた作品を書いている。

3. 死のイメージの効果

プラスはなぜ死を扱い、作品に表現するのか。中には彼女の父に対する心理状況を吐露する作品もあり³、そのような作品群からは読者に共感とまではいかずとも、広く受け入れられるような意図を見つけるのは難しい。では、プラスはなぜそのような作品を書き続けていたのだろうか。

その一因として、プラスが自分の心理状況を最優先させて創作していたことがあげられる。ロバート・ロウエルの影響を受けつつも、抑圧された感情を言葉にし、試作していく過程そのものが彼女の父親の死の影響を受けた不安定な精神を安定させるための自己回復手段と考えられる。心理学者デマリス・S・ウエーアが論じるころによれば、自己の内面にある抑圧されたものと対峙することで、その内面から自己を変化させることがありうるとしている (36)。プラスは詩作によって、自己回復からさらなる段階、自己変化を目指していたのかもしれない。

先に紹介した作品“Electra on Azalea Path”では、父と死別した喪失感のみ表現されていたが、1962年10月に書かれた“Daddy”では、“Daddy, I have had to kill you.” (line 6) と父の喪失感にとらわれ続けている自己を解放させるために「あなたを殺すべきでした」と心情の変化が見受けられる。このようにプラスの対峙すべき抑圧された内面は「父の死」であり、これと対峙するために死のイメージを用いていたのである。

このプラスが内面と向き合う行為には、大胆な表現が用いられており、一部の読者に与える影響が大きいことを主張したい。“Daddy”にみられる父への攻撃的な表現は、父＝父権社会に対する表現と読み取ることができ、これはフェミニズム運動⁴が盛んであった当時に多少とも影響を与えている。プラスの立場からすれば、死のイメージを用いて彼女の自己回復手段を表現しただけなのだが、一部の読者にはその表現方法が共感を得られるものとして効果を発揮したのである。

ここからは、次のような分析をしたい。プラスの作品中の言葉に焦点をあて、彼女が死以外の何かを意図しているかどうかは不明であるけれども、その言葉が象徴するものを読み取る。これが確認できれ

ば、作品の中でそれぞれの言葉が象徴する死のイメージパターンは、プラスが父の死を悼んで書いた作品だったとしても、例えば先のフェミニズム運動のような、作者の意図を超えた自由な想像を促すことを可能にする普遍的象徴パターンであることがわかる。

先のグロテスクな表現を含む作品、“The Surgeon at 2 a.m.”から分析をする。第1スタンザに表現された「7つの穴」、顔が布で覆われているためにできた目、耳、鼻、口の穴を示しているところや、第5スタンザの「明日、この患者は清潔なピンクのプラスチックの義足をつけるでしょう」という表現に注目したい。これは古代エジプトの埋葬方法をイメージさせる。古代エジプトでは、死者の眼窩に石をはめこみ、そしてその死者が戦争や何かで四肢のいずれかを失っていた場合、代わりにのもので失った部分を補っていた。プラスの作品では、顔の穴はその石をはめ込む前の段階であり、一方の脚は「(手術室に)残っている」状況で、切断せざるを得なかった脚だったのか不明であるけれども、真夜中に行った不思議な外科手術のイメージを超えて古代エジプトの埋葬方法の神秘を象徴しているのである。また別の死のイメージによる解釈をするのなら、この脚を失った患者はプラスの父をイメージさせていることをあげたい。プラスは父に外科手術を施し、作品の中で死にゆく父を救おうとしていたと読み取ることができる。はじめ、作品の中にあるのは死のイメージのみであったのに、やがて死から再生へとつながるイメージの変遷が見受けられる。

プラスは、植物を作品のタイトルに用いていることがある。次は、その中からケシ (poppy) について分析する。ケシは「第一次世界大戦の戦没者を悼む各国共通のシンボル」(『死を考える事典』167) であるのに対して、プラスの“Poppies in July” (1962) では、ケシの赤色は「地獄の炎」であり、「花卉の赤色はくちびるのようで、血を流している」とケシは死を悼むというよりはむしろ死そのものを表現する手段として用いられている。確かにケシには死をともしなうイメージがある。ケシの品種の一部には麻酔剤や鎮静剤を生成する成分があり、また麻薬のアヘンの原料でもある。プラスはケシが持つ危険性に注目して作品を書き、“Where are your opiates, your nauseous capsules?” (line 10) とアヘン、もしくは鎮

静剤を求めている。この作品におけるケシは、死者を悼むもの、その一方で過剰摂取によって死にいたるかもしれないもの、二つの意味を持った死を象徴するパターンと言える。

このように作品の言葉に注目して分析していくと、プラスが自己の内面回復手段として父の死と対峙すべく死をイメージさせる作品を書いているだけではないことに気付く。作品中の言葉に含まれている象徴パターンが様々な解釈を読者にゆだねている。

ここで、もう一つの死のイメージの効果を提示したい。それは、プラスの作品にある死のイメージを神話の一つとして読むことである。神話の中には、オシリス⁶ (Osiris) やアドニス⁷ (Adonis) のように一度死んでよみがえる話がある。プラスの作品にも死のイメージを与えながら、よみがえりや生への期待がこめられた作品がある。

例えば、彼女の最後の作品である“Edge” (1963) では、死んだ女性が自分の子どもたちを体内に戻し、死を迎える準備をしている。タイトルである「縁」とは生と死のはざまを暗示している。そして死を迎える準備をするのとは正反対に、よみがえりの準備をしている可能性を示唆する作品とも言える。自分の体内から生まれた子どもたちを再び体内へと戻す行為はまるで自己再生のようである。

他にも、またこの作品からの指摘となるが、“Electra on Azalea Path”の「私」が自ら地下へもぐって父の思い出にふけり、やがて目覚めるその過程は死のイメージを持ちながら、再生をイメージさせる神話的要素を含んでいる。“I have done it again.”

(line 1) ではじまる“Lady Lazarus” (1962) では、よみがえりをくりかえす女性が登場し、そのよみがえりの行為を自虐的かつ簡単な仕事をすませたかのような語り口で表現している。

このように作品の死のイメージを神話的モチーフとして読み取ることで、作品を神話のように普遍的な読み物としてとらえ、普遍的であること、つまり、作品が作者の内面を表現している以上の効果を発揮していることがわかるのである。

4. まとめ

今回取り上げたシルヴィア・プラスの作品にある

死をイメージした穏やかな描写や、時には暴力的でグロテスクな表現には作者自身の内面にある抑圧からの解放だけではなく、読者に共感しうるものをもたらす働きがあることを確認した。プラスの作品に死をイメージさせる作品が多くあるのは、作者自身の父に対する思いの葛藤を解決させるためであり、その一方で、それらの作品の中にある死の象徴や普遍的イメージをあたえる神話的モチーフとなる言葉によって、広く読者に受け入れられることに成功している。プラスは実に巧みな技法を施す詩人なのである。

- 2) Heyman, Ronald. *The death and Life of Sylvia Plath*. N.p.: Sutton Publishing, 2003.
- 3) Plath, Sylvia. *Collected Poems*. Ed. Ted Hughes. London: Faber and Faber, 1981.
- 4) グレニス・ハワース、オリヴァー・リーマン編、『死を考える事典』荒木正純監訳、(東洋書林、2007年)
- 5) ウェーア、デマリス・S『ユングとフェミニズム—解放の元型—』村本詔司、中村このゆ訳 (ミネルヴァ書房、2002年)

注

- 1 プラスの自殺後 1981年、ヒューズが編集した *Collected Poems* が出版される。
- 2 ヒューズは *Journals of Sylvia Plath* を 1982年に出版したが、プラスの日記全てを載せたわけではなかった。より完全に近い日記はカレン・V・クーキル (Karen V. Kukil) の編集、*The Unabridged Journals of Sylvia Plath* というタイトルで 2000年に出版された。
- 3 1959年、プラスはロバート・ロウエルのセミナーに参加している。プラスは彼の自己の経験を告白する作風の影響を受けていると多くの研究者によって分析されている。
- 4 1960年代のフェミニズム運動は、この運動の第1期とされている19世紀後半のものとは異なる。男女の性差による役割がそれぞれにあることを主張しつつ、男性優位の社会構造であるがゆえに、女性は抑圧されていることを広く伝えようとしている。
- 5 プラスの父は壊疽により足を切断している。
- 6 エジプト神話に登場する。弟に殺されるも彼の妻によって復活し、幽界の王となる。
- 7 ギリシア神話に登場。狩りで命を失うが、アフロディテにより神としてよみがえる。

参考文献

- 1) Coupe, Laurence. *Myth*. London: Routledge, 1997.